

マイスコープ

## 上越市でミゾゴイ繁殖

上越市 古川 弘



2007年7月30日撮影



2007年8月14日撮影

2005年5月8日、いつものように朝の探鳥コースを歩いていると、反対側の山から聞きなれないボーボーという二声を聞いたのが、ミゾゴイ探しを始めるきっかけに成りました。県内では確かなミゾゴイの繁殖記録は無く、当時の私には「謎が多く簡単には観察できない鳥」くらいの知識しか無かったです。早速声を頼りにミゾゴイの探索に入りましたが、6月9日の囀り終了まで是という収穫はありませんでした。

翌2006年には5月9日に初鳴きを聞くも、その後は頼りの声すら聞く事ができず、7月16日に林道で採食するミゾゴイに出会えただけで終わったのです。そして迎えた本年は、初鳴きが遅く、今年も駄目かと諦めかけた5月26日ようやく初鳴きを聞きました。それから巣立ちを迎える8月19日までの悪戦苦闘の3ヶ月が、今考えるとあっという間に過ぎていました。飛来し巣造りに入るまでの行動とか、まだまだ観察できなかった事を継続して観察していきたいと思います。繁殖地とか詳細については発表ができるようになるまで、暫く時間（数年）を頂きたいと思います。

# 続・市街地の鎮守の森で繁殖するアオバズク

上越市 後澤 正知

アオバズクが繁殖するためには、営巣する樹洞があること、雛を育てるのに十分な餌が確保できること、こんもりとした葉陰があり、安全安心なねぐらが得られることの三つの条件が必要である。

本号では前号 No.63 に引き続き、繁殖活動の「産卵・抱卵」以降について記す。

## 《産卵・抱卵》

雌雄は巣穴が決まってから産卵・抱卵に入るまでの間、交尾の後雌雄で巣穴への出入りを10分間ほど繰り返し行う。求愛給餌も繰り返しながら産卵・抱卵の日をむかえる。雌が抱卵に入った兆候は、雄がある日から巣穴近くの気に入った止まり木で見張りに入るので分かる。

アオバズクは、もちろん昼間でも目は見えている。雄は見張りの枝に止まっていながら、日中はほとんど居眠りをしている。13mほどの高さの枝に止まっている雄は、下を人間や猫が通っても、大きな目でじろりと見るだけで特別な反応は示さない。目さえ開けないことが多い。さすがにカラスが巣穴に近づくと飛び立って追い立てた。

雌が抱卵に入った時期は5月下旬が5回、6月上旬が2回、6月中旬が1回、不明が1回(1995)であった。抱卵している雌は餌をどのように得ているか調べた。それは、①雌が巣穴から出て近くの枝で雄から給餌を受ける方法、②雄が巣穴の雌に餌を運ぶ方法、③雄が巣穴の雌を誘い出して近くの枝で給餌する方法があり。この中で①②の方法が多かった。雄が雌に給餌する時には、餌を食いちぎって口移しで与えることが多い。雌が巣穴から出た時には5分から10分ほどで巣穴に戻るが、長い時は20分ほど離れていることがある。この時は雌自身で餌を捕っているのだろうと思われる。

夜間の行動雄：日の入りが近づくと時間をかけて念入りに羽づくろいを行い、日の入り後に活動を始めた。雄は雌が抱卵に入った5月下旬頃から「ホッホー、ホッホー」と鳴くのが少なくなった。

雌雄の夜間の活動例：1996年6月14日(抱卵15日目頃、天候曇り、日の入り19時08分)に観察した状況を以下に記す。

18:40 観察を開始する。

18:50～19:17 雄が見張りの枝で羽づくろい、伸びを行う(恒例の行動である)。

19:17 雄が飛び立って巣穴に入り、1分から2分ほどで出る(恒例の行動である)。

19:22 雌が巣穴から出て境内を飛び回る。

19:26 雌雄が同じ枝に止まり、雌が羽づくろいを始める。

19:28 雌雄で巣穴に入り、雄は1分から2分ほどで出る。

19:30 雄が巣穴に餌を運び1分ほどで出る。

19:32 雌が巣穴から出て、境内を飛び回って餌を捕る。

19:46 雌が巣穴に戻る。

19:46以降 雄は境内周辺を見回ったり、営巣木ケヤキ(A)の樹冠部で、その位置から境内の外周がよく見え、巣穴も見える3箇所ほどの決まった枯れ枝で、見張りをする時間が多くなる。そしてときどき餌を捕って雌に給餌する。縄張りの見回りのためときどき10分から20分ほど、姿が見えなくなることがある。ある時、突然境内の内外で早いテンポの鳴き声で、長く何回か鳴くことがある。これは縄張り宣言、警戒声と思われる。

22:45 観察を終了する。

雌雄の朝方の活動の例：1996年6月18日(抱卵19日目頃、天候小雨、日の出4

- 時 27分)に観察した状況を以下に記す。
- 3:35 観察を開始する。アオバズクの動きはまだない。
- 4:05 雄が巣穴に入り、1分から2分ほどで出る(恒例の行動である)。
- 4:06～4:25 おすが3回餌を巣穴へ運ぶ。
- 4:29 雄は活動を終え見張りの枝に止まる。
- 4:40 観察を終了する。

### 《孵化・樹洞内育雛》

卵の孵化は抱卵に入ってから約25日を要した。5月下旬に抱卵に入れば6月下旬に孵化することになる。孵化の時期は6月下旬が7回、7月上旬が1回、不明が1回(1995)であった。

孵化の兆候は、雄親が雛に餌を運ぶため巣穴に入出入りする回数が多くなるので分かる。孵化後7日間ほどは雛に餌を運ぶのは雄親であった。この時期、雛の餌は主に小型の甲虫こうちゅうとガである。餌を運ぶ時、巣穴から4m～5m離れた枯れ枝で餌の頭の部分や羽を取ってから運んだ。このため地面に1.5cm前後の甲虫の羽が多量に落ちていて、餌は十分足りていることがうかがえた。

4月下旬の初鳴きに始まったアオバズクの観察は、7月13日頃が観察期間の中間点である。6月下旬に孵化した樹洞内の雛もこの頃には、孵化後22日前後になっている。巣立ちまであとわずかである。親鳥は一夜に何回雛に給餌しているのか、雛の成長の段階に応じて毎年のように2回から3回調べた。

一夜に行った雛への給餌の例：2003年7月15日に観察した状況は、孵化後24日目頃の雛3羽(雛の数は後日巣立ちしてから判明)、天候曇り、日の入り19時07分、月齢15.3(出20:40、入り5:37)、翌日の日の出4時38分、餌運びは雌雄で行った。給餌は19時20分に始まった。

- ① 19時20分～20時の間 44回(62%)
- ② 20時～21時の間 9回(13%)
- ③ 21時～24時の間 7回(10%)
- ④ 0時～3時30分の間 1回(1%)

- ⑤ 3時30分～4時30分の間10回(14%)
- 以上合計71回の給餌であった。

アオバズクの捕食時間帯は、日の入り後と夜明け前40分～50分に集中しており、深夜はたまにしか餌を捕らなかった。これは餌になる昆虫の活動時間と一致しているようである。親鳥は効率よく餌を捕るため、巣穴を中心に雌雄反対方向の区域で活動していた。

### 《巣立ち》

巣立ちをするのは、孵化後約28日であった。雛が巣穴から顔をのぞかせるようになると4日～5日で巣立ちをする。一番早い巣立ちは7月18日で、遅いものは2000年の例外を除いて8月7日であった。7月下旬の日の入りは19時05分頃で、雛は19時10分頃から19時40分頃の間、巣立ちをした(付表-1)。

巣立ちの仕方には二つの型がある。それは、①巣立ちが出来るようになった雛から、何日かかけて順次巣立ちをしたのが5回、②一番成長の遅れている雛にあわせて、一齐に巣立ちをしたのが3回であった(付表-1)。観察を行った12年間に巣立った雛は25羽であった。

アオバズクの雛はほとんど跳べない状態で巣立ちをする。

巣立ちの例：2003年7月21日に観察した状況は天候曇り(22日朝方小雨)、日の入り19時04分、月齢21.3、翌日の日の出4時35分。

18:50 観察を開始する。

18:58 雛が1羽巣穴の入口に体を乗り出す。巣穴のある枝の上面へ上がろうとして羽をばたつかせる。

19:08 この雛巣穴の縁を伝って枝の上面へ這い出て巣立ちをする(図-6参照)。そのまま伝い歩きで高い方へ上がって行き、巣穴近くの気に入った枝に留まり夜を明かした。

19:20 さらに一羽の雛が巣穴の入口に体を乗り出す。この雛、この日に巣立ちをし

なかった。巣立ちをした雛と巣穴のひな共に引き続き給餌をうけた。

21:00 観察を終了する。

7月22日 3:30 観察を開始する。

3:45 親鳥南西方向の住宅地の電柱で115回鳴く。小雨降り始める。

4:06 巣穴の入口で雛が1羽動いている。

4:11 親鳥6回鳴く。

4:16 前夜巣立ちをした雛が、一夜留まっていた枝と25cmほど離れて向かい合った枝へぴょんと跳び移る。

4:21～4:37 親鳥巣穴の雛に11回給餌する。

4:35～4:40 前夜巣立ちをした雛が向かい合った枝へ、6回ぴょんと跳び移っては元の枝に戻る動作を繰り返した。

4:40 雌親が営巣木ケヤキ(A)の西側10mのイチョウの木で、巣立ちをした雛をねぐらへ導くため非常に低い澄んだ声で「ヒューヒューヒュー」と尾を引いて鳴く。雛はこの声を合図に飛んだが、まだ飛翔力がほとんどなくケヤキ(A)の下方の枝に落ちた。さらに地上4mほどの枝まで落ちた。この親鳥の鳴き声は、翌22日に巣立ちをした雛のねぐら入りの時にも観察した。

4:45 雌親は雛の止まっている地上4mの枝に移って雛を見守り、ここを第1日目のねぐらにする(図-7)。雄親は巣立ちをしない雛が巣穴に残っているので、引き続き見張りの枝に留まる。

5:00 観察を終了する。

雛にとって最も危険な時は、この巣立ちをした翌朝のねぐら入りで、地上2mほどの枝まで落ちた雛(図13)、あるいは地上まで落ち、猫に捕食されたこともあった。

### 《巣立ち雛の育雛・家族生活》

雛への給餌はおもにセミ、甲虫、ガ等の昆虫類である。当地におけるアブラゼミの初鳴きの状況は付表-1のとおりであった。アオバズクの雛が巣立つ頃と、アブラゼミの羽化が最盛期をむかえる頃とが一致している。ア



図-7, 2003年7月22日 営巣木ケヤキ(A)の地上4mほどの枝に止まる巣立ち翌日の雛と、これを見守る雌親。雛は愛らしい表情の中にも野生の猛々しさがある。警戒して親、雛とも体を細めている。

ブラゼミは雛にとって最上の餌で、アオバズクは巣立ちの時期をアブラゼミの羽化にあわせているようである。2003年7月25日から9月2日の間、境内と稲田小学校に挟まれた506㎡の校庭で、アブラゼミの羽を拾い生息数を調べたところ713匹分あった。これに雨で流された分および境内1,964㎡の分を併せれば、優に倍ちかくの数になると思われる。境内での調査は雑草が生え、社務所の敷地もあり出来なかった。

アブラゼミは日の入り前後のひとつ、辺りを飛び回るので親鳥はこれを捕まえたり、幹に止まっているのも捕まえたりする。雛の食欲は旺盛で、巣立ち後7日ほどはふわふわした飛び方で親の方へ枝から枝へと移動し、「リー、リー、リー」と鳴き、体を左右に振って餌をねだる。地上に落ちた食痕を見るとセミおよびガの羽、甲虫の残骸、



図-8, 2001年7月28日 アオバズクの食痕：アブラゼミ、ニイニイゼミ、オオミズアオ（大型のガ）、各種の甲虫。カブトムシの足は朝方まだ動いていた。

時には小鳥の羽がまとまって落ちている（図-8）。このように、餌は十分足りていることがうかがえた。

雛への給餌の例：1996年7月30日に観察した状況は巣立ち後6日目、雛4羽、日の入り18時56分、翌日の日の出4時51分。日の入り前の18時43分に親鳥1羽がイチョウのねぐらを出てケヤキ(A)に移る。安全が確認できれば雛にねぐらからでるよう「ホッホー、ホッホー」と慈愛に満ちたやさしく澄んだ低い声で呼びかける。これを合図に雛1羽、親鳥、雛2羽、雛1羽の順に19分かけて6羽の家族がケヤキ(A)に移る。給餌は19時05分に開始して、20時10分頃までの約1時間に集中して行い、これ以降はたまにしか餌はとらない。翌朝は4時10分から4時45分までの35分間であった。

アオバズクの雛は成長にあわせて活動する生活空間を変えた。それは、①雛がふわふわとした飛び方をする巣立ち後14日目頃まで

は、雛の安全のため家族は樹木の樹冠部の線より内側の空間を生活圏としている。②これが過ぎ15日目頃からは飛翔力がつき、生活圏が樹冠部の外側に移り、境内周辺で活動するようになる。雛の飛び方にはまだ瞬発力はないが、コウモリを追いかけるようになる。③巣立ち後18日目頃には雛も餌を捕れるようになる。この頃になると親鳥は、雛を境内周辺に残して別行動で遠方へ出て行く。④巣立ち後21日目頃になると雛は親鳥と同じほどの大きさになり立派な若鳥の姿になる。そして家族で自由に飛び回るようになった。

### 《ねぐら》

アオバズクは雛の成長にあわせてねぐらも変えた。ねぐらは広葉樹と針葉樹を利用する。ヒナの巣立ち後、2日から5日ほどは営巣木のねぐらで過ごし、その後枝張りが良く枝と葉が密集した広葉樹（イチョウ）にねぐらを変えた。



図-9、2001年8月1日 社務所裏のスギ林の枝に止まる巣立ち13日目の雛と親鳥。雛は精悍な顔つきで独立心も強く  
なっている。図は3羽の姿を入れるため、約20度右に傾いている。

針葉樹（スギ）より先に広葉樹を利用するのは、①雛がねぐらに入りやすい、②家族が塊まってねぐらを取りやすい、③樹冠の中から外に向かって見通しが利いて親鳥が警戒しやすく、逆に外部からは中が見えにくい等が考えられる。

ねぐらに入っているところを見ると、親鳥は雛と同じ枝に留まるか、雛の止まっている枝より後の枝に止まり、雛が親鳥より前になる様な位置で見守った。

広葉樹で10日間ほど過ごし、巣立ち後14日ほどするとひなも成長しスギ林にねぐらを変える（図-9）。この頃の雛は独立性が強くなる。ねぐら入りも家族のぼらつきが出て、塊まってねぐらをとらなくなる。こうなると小枝の密集した枝が、折り重なっているスギ林の方が安全性が高いようである。このようにねぐら変えは2回行った。諏訪神社におけるアオバズクの天敵はカラス、オナガ、猫である。

### 《南への渡り》

ねぐらで離合を繰り返していた家族は、9月の下旬を迎える頃に南への渡りが始まる。家族は1羽減り、2羽減り段々数が減っていき、ある日境内から姿が見えなくなる。その状況は付表-1のとおりであった。

### 《アオバズクの繁殖に及ぼす影響》

樹洞について：2004年までに判明した営巣できる樹洞は5箇所であったが、2006年には3箇所になった（付表-2）。利用頻度が高いケヤキ(A)の枝(ウ)は腐朽が進み、樹洞の上1.6mほどの所から上部は切り詰められた（図-6）。ケヤキ(A)の幹は地上4mほどの所まで、コシキサルノコシカケ菌が侵入して樹全体を弱らせており。寿命は先行き不透明である。

ねぐらについて：参道脇に生育し最も良いねぐらとなった8本のスギ林は1998年に伐採された。2005年には境内のイチヨウ、あ

るいは参道および社務所裏に生育しているスギが、高さ15mほどの所まで枝打ちされ、ねぐらが大きく損なわれた(図-10、12)。特に社務所裏のスギ林は、最後に残された良好なねぐらであった。

### 《おわりに》

2001版「レッドデータブックにいがた」によると、アオバズクは新潟県カテゴリーで「準絶滅危惧」に区分されている。その原因の一つに大木の樹洞に営巣するため、屋敷林の伐採や改変等が指摘されている。アオバズクが繁殖する近隣の神社においても、老木のケヤキの大木が伐採され、または樹洞のある枝が切り取られた。諏訪神社においては、アオバズクの繁殖に必要な三つの条件の中、樹洞2箇所の消滅がある。樹木の枝打ちによって安全安心のねぐらが大きく損なわれ、巣立ちした雛の育雛に支障が出るおそれがある。



図-10、2007年4月10日 高さ15mほどのところまで枝打ちされた境内のイチョウと、同じく社務所裏のスギ林。

その上、2006年にチョウゲンボウがケヤキ(A)で繁殖したため、アオバズクは繁殖できなかった。このように諏訪神社の環境は一年一年悪くなっている。

機会があるたびに諏訪神社となりの稲田保育園年長組の園児を対象に、アオバズクの雛の観察会を行い、その生態について説明をしている(図-11)。

アオバズクの鳴き声は多様である。今後、さらに観察を重ねて考察する余地はあるが、その鳴き声を付表-4にまとめてみた。

今後もアオバズクの繁殖を見守っていきたい。皆様のご教示をお願いしたい。



図-11、2001年8月1日 境内で雛の観察をしている稲田保育園年長組の園児達。毎年アオバズクの巣立ちを楽しみにしている。



図-12, 2007年4月10日 参道越しに見る本殿、参道の杉が高さい10mほどのところまで枝打ちされている。



図-13, 2007年7月20日 巣立ちした翌朝に地上2mほどの枝まで落ちた雛。

#### 付表4 アオバズクの多様な鳴き声

##### 1. 基本の鳴き声「ホッホー、ホッホー」と発声の種類（聞き分け）

声量（音色）		鳴く時の状況	参考項目
高い 	(1) 甲高い	雄が境内の周辺にきた（入った）相手を追い立てるとき、怒りを含んだ声で早いテンポで鳴く。281回続けて鳴いたことがある。	交尾・求愛給餌
	(2) 高い	雄がつかいの相手を叫ぶとき	つかい形成
	(3) 高いまたはやや高い	鳴く頻度は少ないが雄が突然けたたましく鳴く。これは縄張り宣言、警戒声。一度鳴くと境内の内外で何回も早いテンポで長く鳴き、176回続けて鳴いたことがある。	産卵・抱卵
(4) 基準・標準		つかい形成後、夜間活動中に軽快な感じで鳴き、家族のコミュニケーションの状況がうかがえる。	
低い 	(5) 優しくやや低い	雄がつかいになる相手が近寄ってきたとき、声にときめく感情があらわれている。	つかい形成
	(6) 優しく澄んでいる	夜活動に入るとき、親鳥がねぐらの雛にねぐらから出るよう呼びかけるとき、慈愛に満ちた声。	巣立ち雛の育雛・家族生活
	(7) 低いが澄んでよく通る	樹洞（巣穴）選びのとき、雌が巣穴の入口でなく雄に答えるとき。	営巣樹洞（巣穴）の選定

##### 2. その他の鳴き声

鳴き声	鳴く時の状況	参考項目
(1) クウー、クウー、クウー	交尾のとき、低く力強い。	交尾・求愛給餌
(2) ホッホッホッホッホッ	樹洞（巣穴）選びのとき、雄が発する。非常に低い声で連続して鳴く。だんだん声が上向ってくる。	営巣樹洞（巣穴）の選定
(3) ヒイーヒイーヒイー	巣立ちした翌朝に雌親が雛をねぐらへ導くとき、非常に低いが澄んでよく通る声、長く尾を引く。	巣立ち
(4) ホオー、ホオー、ホオー	巣立ち雛が地上に落ちて、猫に捕食されたとき、親鳥が猫を威嚇する腹に響く声。	巣立ち
(5) リーイ、リーイ、リーイ	雛が餌をねだるとき、低い声。	巣立ち雛の育雛・家族生活

# 初代、県支部長 加藤忠一先生を偲んで

阿賀町 渡部 通

日本野鳥の会新潟県支部の初代支部長を務められた加藤忠一先生が、本年4月3日に逝去されました。訃報を聞いて、ただ茫然としてしまうばかりでした。享年85才、心からご冥福をお祈りいたします。

加藤先生に初めてお会いしたのは、中学生になって間もない頃（昭38年）でした。阿賀町麒麟山で探鳥会が行われ、先生のお話を聞きたくて、最前列に並んだのを思い出します。それ以降、麒麟山と月山の探鳥会には必ず参加し、鳥全般にわたってのお話は興味が尽きませんでした。飯豊山の調査が行われた際、先生の引率は大きな支えとなりました。憧れの飯豊山に登って、初めて見る高山鳥の姿や囀りをご教示いただき、大きな感動を覚えました。飯豊連峰の鳥類調査をまとめた報文は、県内の山岳鳥類調査のバイブル的存在になったといっても過言ではないと思います。また、身近な自然の象徴としての月山のブナ林が伐採されると知るや、署名簿を作って国や県、村などに陳情しました。趣意書や請願書の作成、説明など奮闘ぶりはすごいものでした。そのご尽力により、月山は新潟県自然環境保全地域に指定されています。ブナ林保全運動は、のちに日尊の倉山（福島県境）のブナ林保護運動の礎にもなりました。現在、日尊の倉山に広がるブナ林700haは、林野庁が越後山脈遺伝子資源保存林として、将来にわたって保全されることになっています。

先生の家に一升ビンを持っていくと、「今日はこれを空にしないと返さないから」といわれ、飲みながら、鳥、動・植物、自然保護、時代の流れ、音楽の世界など…。話しのネタは尽きないくらいにポンポン飛び出てきますが、話しは常に簡潔明瞭で、要点を話す時はいつも目がキラキラ輝いていました。

日本野鳥の会新潟県支部創立の際は先生が



在りし日の加藤忠一先生  
(1976年5月10日 阿賀町の月山にて)

規約など素案を練り上げ、設立にこぎつきました（1978）。県支部長は2年で退任されましたが、辞任の際は断固として譲らず、総会が会長人選で進行しなかったことがありました。このような頑固さは、超一流で、一度決めたら絶対に曲げないという徹底さに、あらためて敬服・脱帽といった感じです。

2006年5月28日に地元の観察会（大倉峠）に参加され、和気あいあいの中で談笑していたのが最後のフィールドとなりました。同年のお盆過ぎに軽い脳梗塞で入院され、リハビリを受けながら、フィールドに出たいと盛んに話していました。2007年4月3日お見舞いに出かけた際にはベットの中から目を開けて、ゆっくり手を上げてくれたのが最後とな

りました。ヤマザクラの蕾が膨みかけ、センダイムシクイが渡ってくる頃、先生は旅立って行かれました。

去る6月24日、先生が生前から希望しておられた飯豊山への分骨登山を行ない、松平峠と飯豊の主稜が眺められる場所に安置してきました。合掌している耳にジュウイチの鳴き声がひときわ大きく響いてきたのが印象的でした。

### 《加藤忠一先生の業績》

- \* 1950年 新潟県野鳥愛護会評議員
- \* 1973年 新潟県自然環境保全審議会専門調査員
- \* 1972年 東蒲自然同好会設立
- \* 1976年 月山自然環境保全地域の指定に向けて尽力
- \* 1977年 新潟県野鳥愛護会副会長
- \* 1976年 上川村文化財調査審議委員
- \* 1978年 日本野鳥の会新潟県支部長
- \* 1982年 東蒲の鳥類を執筆・刊行
- \* 1985年 上川村（現阿賀町）文化財調査審議委員長
- \* 1986年 新潟県野鳥愛護会会長
- \* 1986年 新潟県自然環境保全審議会委員
- \* 1986年 東蒲自然同好会会長
- \* 1988年 日尊の倉山ブナ林を守る会を設立
- \* 1989年 日本鳥学会永年会員
- \* 1992年 4月日本鳥類保護連盟会長賞を受賞される

## 動物は地震を予知できるか？

柏崎市 小林 成光

中越沖地震を知ったのは、中部国際空港のお風呂のテレビからだ。ほんの少し前、女房に無事帰国した旨の電話をしたばかりなのにテレビは柏崎の悲惨現場を実況中継している。どうなっているのか安否を確認しようにも電話は通じない。途中の道路は到る所で寸断され、家や塀は倒壊して道をふさいでいた

が、どうにかこうにか帰ってきた。家族も我が家も何とか無事だったが、震度6強の地震を体験してない私は話の中に入れない。それからどこに行っても人が集まれば地震の話だが、いつも聞き役だった。その中で地震発生前の面白い話がいくつか聞けたので紹介したい。はたして動物や自然現象は地震を予知し、人間にメッセージを送っていたのだろうか？？

1 モグラが騒いだ。中越地震のときも同じ話を聞いたが今回の人の話は、モグラが地面から土をかき出し、小さな富士山みたいな山を幾つも作った。

2 池のカメが池を抜け出し山の方に歩いて行った。

3 池のカエルが道路を歩いて山の方に向かって行った。前のカメと違う人の話。

4 港に魚（アジ、イワシ？）が大量に押し寄せた。釣り人の話。

5 タヌキが普段より多く車にひかれていた。

6 カラスが居なくなり、今年は畑の被害が少なかった。居なくなったのは地震の前からのような気がする。複数人。

7 家の周りにムクドリが塹をしているが、普段夜中はわりと静かだったのに、地震の数日前からは夜中でもギャーギャー騒いでいて、何か変な事が起きなければと話し合っていた位、鳴き声がうるさかった。この人の家の近くは地震被害の大きい地域。

8 毎年5000羽位のツバメが「悪田自然緑地」のアシ原（湿地）で塹入りするが、地震前には隣接する乾燥したアシ原に移動していた。これは30年も無かった現象だ。

9 毎朝散歩で高台から海を眺めているが、地震当日の海の色がいつもと全く違った青色で、カメラを取りに家に帰った。

10 地震雲を見た。

以上の話はお茶飲み話や、また聞き話なので資料や証拠を出せと言われても困る話だが、何か参考になればと書いてみた。昔からナマズが地震を予知するという話は、何かうなずけるような気がする。

# 今年も阿賀野川河口部で オオバンが繁殖

新潟市 千葉 晃

阿賀野川河口は、かれこれ35年も通うお気に入りのフィールドだ。夏は川風を感じながら鳥や花や一带の景色を楽しむ。新潟空港と隣接する左岸一带にはよどみや葦原があり、水辺ではカイツブリ、バン、オオバン、ヨシゴイなどが繁殖し、ヨシ原や草地では大オオヨシキリ、コヨシキリ、ホオアカが子育てをする。

ここには新潟市下水処理場から放出される処理水が注ぎ込み、餌生物が多いせいか、秋から冬にかけてはコガモ、カルガモ、オオバンが群れて餌を取る様子が近くで観察できる。オオバンは多い年には50羽以上を数えることができた。今年は撮影の練習を兼ね、7月下旬に3回ほど観察に出掛けた。運よく3ペアの繁殖が確認できた。ごく狭い水域で、しかも昨年の大出水で自然環境は悪化したと思われるのに・・・である。

雛の大きさと数、それに出現する場所のちがいから少なくとも3ペアの繁殖と判断した(図1~3)。写真でその様子を簡単に説明する。図の1, 4, 5は仮にA家族と呼ぶもので、排水口付近にあり、雛2羽を連れていた。警戒時には、親(図5)と同様に雛(図4)も大きく口を開け、鋭い声を発した。警戒相手の1つはすぐ近くで繁殖しているバンの家族であり、両者は互いににらみ合いや追撃などを行った。バンの親2羽が1羽のオオバンを撃退する様子(図6)や、反対にオオバンがバンを追いつく様子(図7)も撮影できた。A家族に隣接するボート置き場付近には、この家族の雛より明らかに小さな雛(図2)を連れて別のB家族がおり、これと同サイズの雛もう1羽を連れていた。一方、下流側の開けた水面には成長の著しい雛3羽を連れての番い(C家族)がいた。この家族に接近した際、親の1羽は雛を連れて私から急いで離れ、もう1羽はこれを見届けるように間合いを取りながら警戒を続け、ゆっくりとこれらについていった。見事な親鳥の連携行動であった。



# 新潟市鳥屋野潟公園で繁殖したトラフズク(短報)

新潟市 岡田成弘

新潟市鳥屋野潟に隣接する鳥屋野潟公園でトラフズクの繁殖を観察したので報告する。

## 1. 繁殖場所：

新潟市中央区鐘木、鳥屋野潟公園(鐘木地区)

## 2. 観察結果：

2007年3月から4月にかけてトラフズク成鳥1羽、公園内のタブノキでねぐらをとる。4月20日7:30 成鳥1羽がねぐらをとるタブノキから約3m離れたクロマツの地上約10mほどの枝分かれ基部に枝を集めて作られた巣の中にトラフズク成鳥1羽を発見。抱卵しているものと思われた。巣材には木の枝のほかに人工物(布状のプラスチック)が混じっており、状況からカラスの古巣と推察された。

4月23～26日、5月1日、5日、6日、10日 抱卵行動確認、この間日没後の観察でも抱卵行動を確認する。

5月1日 抱卵する成鳥の胸のあたりに綿毛のヒナ1羽を確認(本田茂夫氏観察)。

5月14日 成鳥の胸のあたりから顔を覗かせたヒナ2羽を確認。

5月21日 親鳥は巣内から巣外の枝に移る。幼鳥3羽確認。

5月23日 合計4羽の幼鳥を確認、2羽はまだ小さい。

5月29日 巣から離れた枝に幼鳥1羽止まる。

6月1日 巣内に幼鳥認めず。営巣木から離れたクロマツの木に1羽の幼鳥を確認。

6月5日 営巣木から15mほど離れた地面にトラフズク幼鳥と思われる個体の羽毛が散乱

していた。幼鳥1羽死亡したものと思われる(本多貞夫氏観察)。

6月7日以降8月まで幼鳥はクロマツなどの樹木に単独や2～3羽で止まることが多く、その間、親鳥は幼鳥の止まり木に近い樹木(カシ、タブノキなど)に止まる。

9月以降は幼鳥の行動範囲が徐々に広くなり、その後分散・移動したものと思われる。

## 3. まとめと考察：

鳥屋野潟公園(鐘木地区)でトラフズクが繁殖し、3羽の幼鳥が巣立った。女池地区にある鳥屋野潟公園での繁殖記録はあるが、鐘木地区では初めての記録と思われる。営巣木の下にはペリットは一切見当たらなかったが、成鳥がねぐらをとっていたタブノキの下及び巣立ち幼鳥の止まり木の下で多数のペリットを採取した。ペリットにはネズミ類の毛・頭骨・顎骨が多数含まれ、小鳥類の骨と羽毛も見られた。今後ペリットの分析を行い繁殖期の餌動物の解明を行いたい。



巣の中から外を伺う3羽の幼鳥と枝に止まる成鳥  
(2007年5月23日)

発行 2007年10月31日 No.64

発行人 大島 基 編集者 小林成光、浦部良雄、千葉 晃

日本野鳥の会新潟県支部

事務局 〒950-0941 新潟市女池3丁目13番25号

TEL 025-285-2405 本間由紀子方 〈振替口座〉00610-1-6002